
とあるハンターの日々

名も無き野良猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるハンターの日々

【Nコード】

N7828G

【作者名】

名も無き野良猫

【あらすじ】

大人気PSPゲームソフトのMHP2ndGのファンフィクションです。ハンター故の憂鬱、そうでない者の憂鬱を描いた人間ドラマを主体に進めていきたいと思っています。まだまだ至らない点の多い作者ではありますが宜しければ、読んでやって下さい。

プロローグ（前書き）

何を書こうと言い訳になってしまいましたが、戦闘の描写など初挑戦になります。下手な文章で申し訳ありませんが、読んで頂ければ幸いです。

プロローグ

遠い昔『モンスター』と呼ばれていた生き物達がいた。

【草食種】 【獣人種】 【牙獣種】 【甲虫種】 【甲殻種】 【鳥竜種】
【魚竜種】 【飛竜種】 【古龍種】 …これらの生き物達をまとめて『
モンスター』と呼んでいたのだ。

肉食の『モンスター』達は人々から恐れられ、草食の『モンスター』達は人々の労力とされていたりした。

一部に人語を理解する『モンスター』も存在して、人間と協力して生きていたがそれは別の機会にしよう。

そして、この物語の主人公は『モンスター』と対立の立場にある『ハンター』と呼ばれる人々の1人だ。

ハンターは『ギルド』と呼ばれる組織に所属するのが義務付けられていて、ギルドに所属する為には『訓練所』と呼ばれるハンター養成所を卒業する必要があった。簡単に言えば『ハンター』になる為には資格が必要なのだ。理由は至って単純『狩るか、狩られるか』の世界だからだ。

しかし、ハンターになったから一人前ではない。ハンターは『ランク付け』されていて、そのランクによって受注出来る『依頼』が決まるのだ。ランクは大きく分けて【下位】 【上位】 【G級】の3つ。だから、【下位】は初心者。【上位】は中級者。【G級】は上級者というのが一般的な見方だ。

ハンターは多々居れど【G級】まで辿り着く人間は僅か一握りに過ぎない。理由は『狩るか、狩られるか』だからだ。

モンスターに殺されたり、モンスターとの戦闘で負った傷が原因で

引退したり、年齢で引退したり、違う目標が出来たりと理由は様々だが、この世界のシステムの基盤は『狩るか、狩られるか』の一言に尽きる。

この物語の主人公もそんなシステムに正に今立ち向かっている。

プロローグ（後書き）

お付き合い頂きありがとうございます！御座いました！宜しければ、次回も読んで頂ける事を願っています。

1話 出会い。

ギヤア、ギヤア。

私と対峙している青い彼等は本当に耳障りな鳴き声を発する。

「はあ…本当に五月蠅いですね…少し黙って頂けませんかッ！」そんな言葉を相手に投げつけて引き金を引く。タンタンタンッ！と綺麗に響く音と共に貫通弾L.V1が三発発射された。

「全く。マナーくらい弁えて頂きたいものです。」静かになって動かない青い彼等【ランポス】にそう投げ掛けて、武器【蒼桜の対空・覇】を背負い直す。「せっかくのランチが台無しですね…」と言いつつ、腰の【剥ぎ取りナイフ】でランポスの素材を一通り剥ぎ取っていく。三体のランポスから剥ぎ取った素材をポーチに納めると何やら焦げ臭い匂いが漂ってきて、自分が何をしていたか思い出した彼【レン・アイリーン】はその発生源へと走る。

「ランチは依頼が完了してからになりそうですね…はあ…」本当についてないと呟き、炭素化したコゲ肉を焼き肉セットから外すと穴を掘って地面に埋めた。

食べ終わった骨や食べ残しは地面に埋めるのが『狩り場』のルールだった。勿論、守らない者も一部にはいるが…

そして、煤けた焼き肉セットを分解してポーチにしまう。「今日の私は機嫌が悪いですよ…」と毒々しいオーラを放ちながら宣言して、彼【リオレウス】の待つ丘に向かった。

スキル『自動マーキング』のお陰で常に大型モンスターの居場所が分かるので無駄に疲れる事はない。「無駄」この言葉程嫌いな言葉はない。潔癖症ではないが、無駄に疲れたり無駄に時間を過ごすのだけは御免被りたい。だから、せっかくのランチが無駄になったことも、その邪魔をしたモンスターも許せない。

「この鬱憤は貴方で晴らさせて頂きますよ。空の王者さん。」寒気

のするような声でそう吐くと、目的地の巣穴の手間にある広場の様な場所にたつた今降り立った彼【リオレウス】に向かって引き金を引く。心地いい音で発射された弾が狙い変わらず全て命中すると、グギヤアアア！！リオレウスの威嚇する声が辺りに響く。

声が止んだのを確認して、いつも通りに岩影からリオレウスの方を見るもいつもと違う点に気が付いたはレンは「此方を向いていない…まさか！」と口走って岩影から勢い良く飛び出した。

一方その頃

「特産キノコなんて何処にあるのよ」とぼやきながら歩いていた1人の新米ハンターがその広場に足を踏み入れてしまった。

グギヤアア「えっ!?!」アア!!

その大きな鳴き声と恐怖に思わず耳を塞いで屈み込んでしまった新米ハンターが顔をあげると竜が自分に向けて突進して来ていた。

ああ、こんな所で死んじゃうのか…と脳裏に浮かんだ時、目の前が真っ白になった。

そして今

「間に合えええ！」そう叫びながら思いっきり投げたのは【閃光玉】だ。閃光玉は新米ハンターとリオレウスの間で炸裂すると強い光を發した。

その名の通り、ピンを抜いて投げると一定の距離で炸裂して閃光を發する道具だ。モンスターとの視界を奪って錯乱させるには有効だが、それは人間にも同じ事だった。だから使う時は仲間に合図するのが一般的だが、今回はそんな余裕もなく、仲間でもないので連携も取れなかったと言うわけだ。

レンは閃光が収まると再び駆け出した。「何処のバカですか！ 傍迷惑な！」怒りの矛先も変わったらしいが、取り敢えず見知らぬハンターの手を引いて（正確には引き摺って）その場を離れた。

「ちよつと！ 痛い！ 離して！！」そう叫ぶ少女に「……………」無言で応えるレン。「酷いじゃない！ 閃光玉使うなら声くらい掛けてくれないよ……」そう訴える少女はそれ以上を言葉に出来なかった。段々と見えるようになってきた少女の目に映ったのは鬼と化したレンの引きつった笑顔だったからだ。

「誰が酷いですって？ 他人に迷惑を掛けておいてよく言えますね？ そもそも、あなたのせいで狩りが台無しです。どうしてくれるんですか？ しかも、私はあなたの命を救ったんですよ？ 云わば命の恩人ってやつです。それでいてその言いぐさ……あなたバカですか？ いやいや、失礼。バカにバカと言っても仕方ありませんね。あなたは救いようのない大バカです。ハンターなんて辞めてしまいなさい。……死にますよ。」レンは思ったことを洗いざらい少女にぶつけた。勿論、少女に全て非がある訳ではないが、レンの言っていることも間

違つてはいないのだ。だからそんな言葉を見ず知らずの男に言われた少女の反応も容易に予想出来た。

「何で…何でそこまで言われなきゃいけないの…うう…ッ」少女は泣いてしまった。しかし、泣いていられるのだからまだいいのだ。実際は死んでいたかも知れない。「君はまだ幼い。新手の自殺志願者じゃないでしょう？なら、まずは学びなさい。それが出来ないのであれば、ハンターなんて辞めてしまいなさい。遊びではないんです。」レンの言葉は常期的を射ている。真つ直ぐ故に向けられた方は辛いのだ。「私…だって…私…私…です…ッ」最早反論にすらなっていないが、少女は訴える。「分かりました。では、新米ハンターさん。狩り場のルールはご存知ですか？契約金とギルドの存在理由も答えて下さい。」レンには確信があつた。この少女がハンターではないと。すると案の定、少女は黙つた。

バサツバサツバサツバサツ…

「…リオレウスが移動をしているようですね…ここも安全とは言えません。一旦ベースキャンプに戻ります。付いてきて下さい。」そう告げたレンは再び少女の手を引いて歩き出した。しかし、引き摺つてはいない。レンなりの優しさなのか、少女への罪悪感かはわからないが、キャンプに着く頃には少女も落ち着きを取り戻していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7828g/>

とあるハンターの日々

2010年10月9日08時23分発行